

鹿島 茂 著

19世紀パリ・イマジネール

馬車が買いたい！

白水社

著者略歴
 一九四九年生
 一九七三年東京大学文学部仏語仏文学科卒
 一九七八年同大学院博士課程修了
 共立女子大学文芸学部助教授
 十九世紀フランス小説専攻
 著書『レ・ミゼラブル百六景』
 訳書『ジャーナリズム博物誌』、他

19世紀バリ・イマジネール
 馬車か買いたい！

一九九〇年七月五日印刷
 一九九〇年七月二〇日発行

著者 © 鹿島 茂
 発行者 高橋 孝
 印刷者 杉浦 博
 発行所 株式会社 白水社

東京都千代田区神田小川町三の二四
 電話 営業部〇三(元)七八二一
 編集部〇三(元)七八二一
 振替 東京 九一三三二二八
 郵便番号一〇一

図書印刷・松岳社製本

ISBN 4-560-02854-0

Printed in Japan

世紀パリ・イマジネール
車が買いたい！

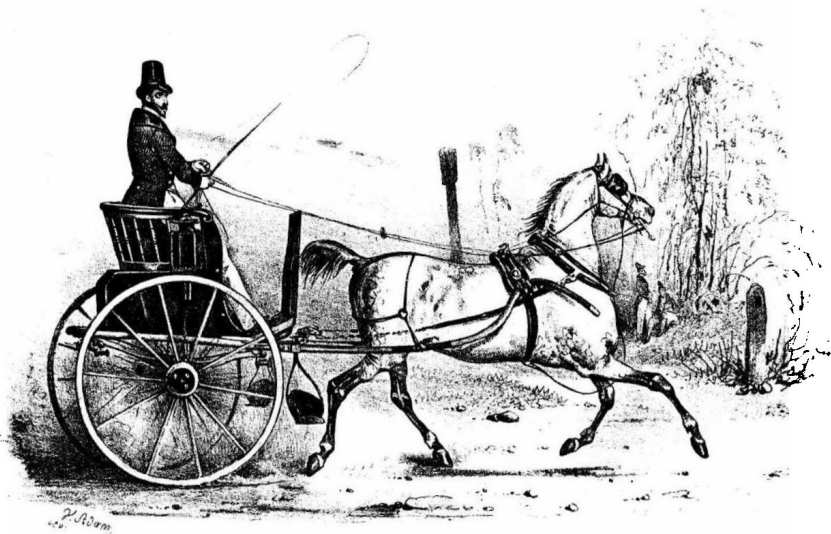
鹿島 茂 著

白水社

江苏工业学院图书馆
藏书章



馬車が買いたい！



目次

《我らが主人公》たちのプロフィール 6

プロローグ パリ街道の彼方 9

第一章 我らが主人公、パリに上る（その一）——郊外馬車と遠距離乗合馬車 13

第二章 我らが主人公、パリに上る（その二）——郵便馬車と旅行用馬車 23

第三章 我らが主人公、パリに上る（その三）——蒸気機関車の登場 33

第四章 市門とパスポート——城壁都市パリ 43

第五章 パリの第一印象と宿探し——麗しの都の実体 54

第六章 食生活（その一）——安レストランの名店 65

第七章 食生活（その二）——自炊と賄い食堂 75

第八章 リュクサンブル公園とチュイルリ公園——庶民とブルジョワの距離 85

第九章 パレ・ロワイヤル（その一）——ファッションの殿堂 97

第十章 パレ・ロワイヤル（その二）——売春と美食の殿堂 106

第十一章	グラン・ブルヴァール（その一）——盛り場の覇者	116
第十二章	グラン・ブルヴァール（その二）——オペラ座の仮装舞踏会とパノラマ	131
第十三章	グラン・ブルヴァール（その三）——犯罪大通り	146
第十四章	お金の単位と物価——小説の経済学的読み方	159
第十五章	生活水準と家計簿——我々が主人公たちの現実と夢	174
第十六章	馬車を買いたい（その一）——馬車なしダンディーの悲哀	187
第十七章	馬車を買いたい（その二）——馬車による階級識別法	202
エピローグ	カルチエ・ラタン今昔（我々が主人公たちの夢の跡）	215
付 録	馬車の記号学	225
あとがき		240
参考文献	和書	243
	洋書	248

《我が主人公》たちのプロフィール

ウージェーヌ・ド・ラスチニャック（バルザック『ゴリオ爺さん』『幻滅』『あら皮』『浮かれ女盛衰記』）

アングレームの貧乏貴族の息子。一八一八年から、戦争未亡人ヴォケー夫人の営むカルチエ・ラタンの下宿屋ヴォケー館に下宿し、パリ大学法学部に通うかたわら、親戚のド・ボーセアン夫人のつてをたよって上流社交界に入り込こみ、出世の糸口をつかもうとする。初め、美貌の伯爵夫人アナスタジー・ド・レストーに接近を試みるが、彼女が、同じ下宿にいた元製麺業者のむじめな老人ゴリオの娘だと知らずに失言をしたため、出入り差し止めになる。ついで、ド・ボーセアン夫人の威光と、父性愛の権化ゴリオ爺さんの後押しのおかげで、ゴリオのもう一人の娘デルフィーヌ・ド・ニュッシンゲン男爵夫人の愛人となるが、社交界の交際費の捻出に苦勞し、危うく同じ下宿にいた謎の中年男ヴォートランの仕組んだ陰謀に加担しそうになる。物語の最後では、巨万の富を二人の娘のために使い果たしたあげく見捨てられたゴリオを臨終の床で看取り、自費でペール・ラシェーズ墓地に埋葬してやる。そして墓地の高台から、上流階級のいる界限を見つめ「さあ、今度はおれとお前の勝負だ」と叫ぶ。『幻滅』では軽薄なダンディーの一人として登場し、パリに着いたばかりのリュシアン・ド・リュバンブレをさんざんにいたぶる。

リュシアン・ド・リュバンブレ（バルザック『幻滅』『浮かれ女盛衰記』）

本名リュシアン・シャルドン。アングレームの薬屋の息子で、『人間喜劇』随一の美青年。親友のダヴィッド・セシャルの経営する印刷所に勤めながら、詩をかきためているうち、ド・バルジュトン夫人に文才を認められるが、妬みから悪い噂をたてられ、ド・バルジュトン夫人と手をたずさえてパリに上る。しかし、パリに着いたとたん、上流社会の魅力に幻惑された夫人にうとまれるようになり、見捨てられる。しかたなく、筆で身を立てる決心をして、カルチエ・ラタンの安ホテルで小説の推敲に没頭するうち、哲学青年のダルテスと知り合い、徹しく自己を律する思想結社《セナークル》の一員となる。だが、安レストランで同席したすれっからしの新聞記者ルストーの導きでジャーナリズムの世界に足を踏みいれ、軽薄な生活に染まるに従い、純真な詩人の心を失って、金と名譽だけで動くジャーナリストになりさがる。やがて、貴族の称号はしさから、自由派と王党派の二股をかけたことが露見し、ジャーナリズムから締め出される。さらに恋人の女優コラリーも病でなくし、尾羽打ち枯らして故郷に戻るが、そこで、自分の振り出した偽造手形のた

めに親友のダヴィドが逮捕されたことを知り、絶望して、自殺をはかろうとする。そのとき現われた謎のスペイン僧カルロス・エレラ（ヴォートラン）に拾われ、彼の手足となつてパリの上流社会に戦いを挑むことを誓う。

フレデリック・モロー（フロベール『感情教育』）

ノジャンの中流階級の家に生まれる。大学に登録するため一八四〇年にパリに上ったとき、一時帰省する河蒸気の上で、画商のジャック・アルヌーの一家と知り合い、美貌の妻マリにひそかな恋心をいだく。やがて法学部に通うかたわらアルヌーの《工芸美術社》の常連となり、アルヌー夫人に思いをよせるが、夫人は夫に忠実で目論見どおりにはことは運ばない。それでも、様々な献身で夫人の信頼をかちえるまでにはこぎつける。夏休みに帰郷したとき実家が破産し、郷里にくぎづけになったままだに時を過ごす。数年後、伯父の遺産を相続して一躍金持ちになり、胸を踊らせてパリに再び上る。陶器商に商売変えしていたアルヌーの家に出入りする一方、長いあいだ夢見ていたハイ・ライフを実現し、知り合いの銀行家ダンブルーズ氏のサロンにも精勤する。アルヌーの情婦のロザネットにも心ひかれるが、夫の浮気に悩むアルヌー夫人の相談に乗るうち恋心がまた燃え上がり、ついに夫人に逢い引きを約束させる。夫人が子供の病気のために約束の場所に来れなかったのを裏切られたものと誤解して、やけくそでロザネットのもとに走る。やがて一八四八年の二月革命が起こり、政治的野心からダンブルーズ夫人に近づき、亡くなったダンブルーズ氏の後釜に座ろうとするが、夫人が破産したアルヌー夫人の形見の品を侮辱するような振る舞いに出たため、かつとなり、訣別する。時が流れ一八六七年にアルヌー夫人と再会するがついに結ばれずに終わる。

マリユス・ボンメルシー（ユゴー『レ・ミゼラブル』）

ナポレオン軍の大佐ジョルジュ・ボンメルシーの息子。大革命とナポレオンを憎悪する母方の祖父ジルノルマン氏に育てられたが、父の死をきっかけに、ナポレオン崇拜者にかわり、祖父と口論の末、家出する。やがて《ABCの友》の青年たちと知り合い、共和主義的色彩を強める。しかし、父への尊敬から共和主義には踏み切れず、シンバにとどまる。貧民の吹留りゴルボー屋敷で耐乏生活を送りながら学業を終え、弁護士資格を取るが、法廷には立たず、出版社の下請けで生活をたてる。リュクサンブール公園の苗木園で、ジャン・ヴァルジャンに連れられて散歩にきていたコゼットを見て、恋に落ちる。

ジュリアン・ソレル（スタンダール『赤と黒』）

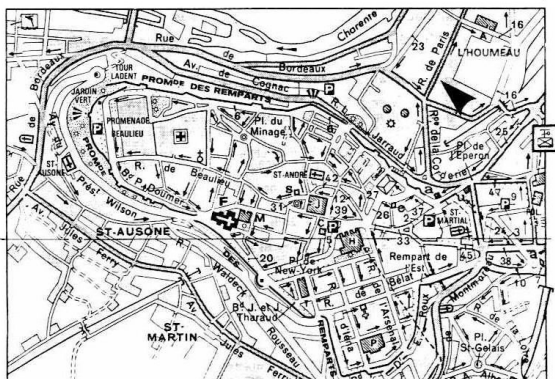
フランシュ・コンテ地方の町ヴェリエールの製材所の三男として生まれる。幼少の頃からナポレオンの『セント・ヘレナ日記』に親しみ、抜群の記憶力でラテン語を暗唱して司祭を驚かす。その学力のおかげで町の実力者レナール氏の家の家庭教師になる。自尊心からレナール夫人を征服したのち恋を感じるようになるが、やがて噂がたち、ブザンソンの神学校に入る。校長のビラール師に気に入られ、バリのラ・モール侯爵の秘書として紹介される。ラ・モール侯爵邸では、令嬢のマチルドと自尊心の火花を散らすような恋をしたあげく、ついにマチルドとの結婚を侯爵に承諾させるまでこぎつけるが、レナール夫人の暴露的な手紙が届き、すべては水泡に帰したことを知る。ただちにヴェリエールに取って返し、レナール夫人をピストルで打ち、断頭台の露と消える。

ラファエル・ド・ヴァランタン（バルザック『あら皮』）

帝政時代に財を築いた父親の厳しい教育をうけてパリ大学の法学部を卒業する。父親が王政復古で破産したため、わずかに残された千百十二フランの遺産を三年分の生活費にあて、安ホテルの屋根裏部屋にこもって耐乏生活をおこない『意志論』の大著を著そうと決意する。だが、偶然知り合ったラスチニャックの影響で社交界に出入りするようになり、美貌の伯爵夫人フェドラとの恋におちる。しかし、フェドラの気まぐれな振る舞いのためわずかな蓄えも底をつき、博奕にも負けてセーヌに身を投げようとする。そのとき偶然立ち寄った骨董屋で謎の老人からすべての意志をかなえてくれるという『あら皮』を譲られる。それ以来、あらゆることが思い通り実現するようになるが、そのたびに『あら皮』は縮まっていき、ついに、愛するポーリーヌに看取られながら息を引き取る。

プロローグ パリ街道の彼方

フランスの地方都市を旅したことのある人なら、どんな町にもヴィクトル・ユゴーの名前を冠した大通りや通りがあるのに気づいて多少の驚きを感じたはずである。つまり、ユゴーはわれわれが想像する以上にフランスの国民的英雄であるということなのだが、これからお話ししようと思つてゐるのは、実はユゴーのことではなく、ユゴー通り以上にどの町にも(特に北部フランスや中部フランスの町では)ほとんど例外なく存在する名称の通りのことである。それは、パリ通りとかパリ街道と呼ばれる通りで、われわれ日本人は、これはさしずめ『○○銀座』にでも当たるのだらうなどと思つてしまふのだが、不思議なことにこのパリ通りとかパリ街道と呼ばれる通りは必ずといつていいほど町外れのうらさびれた場所にある。普通、鉄道で旅行する場合は、こうした通りの存在には



ラスチニャックとリュシアン・ド・リュバンプレの故郷アングレームの市街。パリ街道が残っている。

気づきもしない。ところが、自動車で田舎をまわると、このパリ通り、パリ街道という名称が妙に目に入ってくる。あるとき、なぜだろうと思ってミシュランの地図をひらいて、当たり前といえは当たり前すぎる事実気がついた。要するに、パリ通りとかパリ街道というのは、その町からパリに向かって出発する際に最後に通る道なのだ（あるいは逆にその町に入る最初の通りでもある）。フランスでは、すべての道はパリに通じているわけだから、どの町にもパリに至る道という意味のバリ通り、パリ街道があつて当然なのである。鉄道が普及してからは、なんの変哲もないただの場末の通りになつてしまつたが、それ以前には、この道は、パリに上ろうとする者たちが万感の思いを胸に秘めて故郷に最後の一瞥を投げかけた通りなのだろう。いや、パリに憧れる田舎町の住人は、男女の別を問わず、この通りの彼方にはパリがある！と想像の翼を伸ばしていたにちがいない。そういえば、フロベールの『ボヴァリー夫人』にこんな一節があつたのを思い出す。

「彼女はトストにいる。あの方はパリにおいでだ。あの遠いパリに！パリとはどんなところなのか？なんとすばらしい大きな名だろう！パリ！」

(……)

夜ふけに、魚屋の一隊が荷車に乗つて、『マヨラナの花』の歌を歌いながら窓の下を通ると、彼女はいつも目をさました。石畳の道を鉄の輪をはめた車輪ががらと行くのを聞いていると、町をはずれたあたりから土の道になるので急にその響きが静かになる。

「あの人たちは明日はパリなのか！」とエンマは思う。

そして彼女は空想のなかでその人たちのあとを追ひ、丘また丘をのぼっては降り、村々を

横切り、星明かりのもとに街道をひた走った。」

このように、エンマ・ボヴァリーは空想のなかでパリに旅立つほかはなかったわけだが、バルザックを初めとする十九世紀の小説家がほとんど例外なく書き残しているフランス版ビルドゥングス・ロマン（教養小説）の主人公たち、すなわち、『ゴリオ爺さん』のウージェーヌ・ド・ラスチニャック、『幻滅』のリュシアン・ド・リュバンプレ、『赤と黒』のジュリアン・ソレル、『感情教育』のフレデリック・モローなどは、ある者は乗合馬車で、またある者は郵便馬車に乗って、ありあまる自己の野心を実現すべく、このパリ街道からパリに向かって実際に出発したのである。ところで、かれらは、作者の分身であると同時に、ある意味では当時の野心的な地方青年の類型でもあったはずだ。だから、これらの主人公たちがパリ街道を基点としてその後にとどいていく人生の軌跡を何枚か重ね合わせていけば、そこにはモンタージュ写真のように、十九世紀前半にパリで一旗あげようとして上京した地方出の青年のプロトタイプが浮き出てくるのではあるまいか。そして、実際にはこのプロトタイプは、今日、われわれ読者が、漠然とイメージしている地方出の青年という紋切型とはかなり違ったものではなからうか。

いまだはその町の人々でさえ名前の由来を忘れてしまっているパリ街道を自動車で通過した時に、ふと頭に浮かんだのがこんな思いつきだった。だが、この着想も、ルイ・ユアールという当時のジャーナリストが書いた『学生の生理学』という小冊子と出会わなければ、私の思いつきの多くと同じくその場限りのものに終わっていたことだろう。というのも、いくらモンタージュ写真をつくるといってもやはり核になるような部分が必要だし、それに特殊性をどれほど重ね合わせてもな

なかなか普遍性にはたどりつけないからだ。ところが、一八四〇年代に大流行した風俗觀察のシリーズ『生理学もの』の一冊であるこの『学生の生理学』のなかでは、故郷からの旅立ち、パリ到着、宿さがし、安レストラン、大学の授業、お針子女との恋、カーニヴァルの仮装舞踏会、等々、個々の小説では省略されたり簡単に触れられているだけの学生生活のエピソードがかなり具体的に語られているので、漠然としたモンタージュ写真もこれによって明確な輪郭を与えられるような気がした。さらには、これをもとにしてウージェーヌ・ド・ラスチニャックやフレデリック・モローなどの日常生活を照射すれば、逆にそれぞれの主人公たちの共通性と同時に特異性も見えてくるのではないかと思われた。幸いなことに十九世紀の小説はしっかりと細部まで書き込まれているので、その気になって調べればいくらかでも情報は引き出せる。そして、いったんその情報を解説する方法を体得すれば、これまで読みとばしていた描写や記述がまったく新しい意味をもって現れて、あらたな読解を可能にしてくれるかもしれない。そればかりか、パリに初めて上った主人公たちのあとをたどっていけば、それはひとりでに十九世紀前半のパリのガイド書にもなりえる。フランス社会が社会的なレベルで近代化したのは第三共和制が確立してからのことにすぎず、十九世紀の前半は様々な面で前近代の遺産をひきずっていたのだから、これはもしかするとかなり面白い主題になるかもしれない。そうと決まれば、あとは十九世紀のパリに関する資料を集めるだけだ。

こうして私は、後から考えると天国とも地獄とも思える十九世紀パリの資料収集の深みにはまり込んで行ったのだが、もとはといえば、それはすべて、偶然通りすぎたパリ街道の由来に疑問を抱いたことがきっかけなのである。それでは、この本を、我々が主人公たちがそれぞれの故郷の町のパリ街道に立って彼方を見つめるところから始めることとしよう。

第一章 我らが主人公、パリに上る（その一）

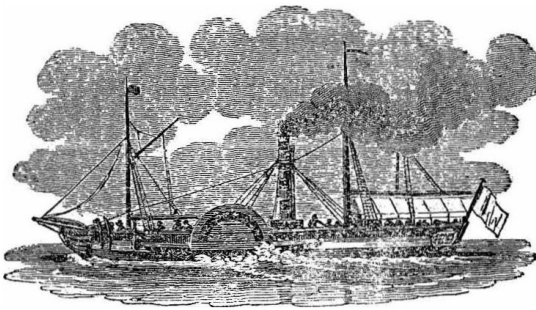
郊外馬車と遠距離乗合馬車

前仕切りの奥に席を占め、いっせいに飛びだす五頭の馬に牽かれた乗合馬車が動きはじめたとき、陶酔感が彼を覆いつくした。

（……）

『感情教育』より

さて、『ゴリオ爺さん』のウージェーヌ・ド・ラスチニャック、『幻滅』のリュシアン・ド・リュバンプレ、『赤と黒』のジュリアン・ソレル、『感情教育』のフレデリック・モローなど、野心に満ち溢れた我らが主人公たちはいよいよ故郷の町を後にしてパリに向かおうと決意した。だが彼らが生きた一八五〇年以前のフランス社会ではまだ鉄道は普及してはいない。もちろんセーヌ河でパリと結ばれているルーアンやサンスの町なら安価な河蒸気を利用するという手があるが、それ以外の都市では陸路でパリまで上るほかはない。では鉄道普及以前の社会において、我らが主人公たちはいったいどのような交通手段を利用することができたのだろうか。次に、思いつく限りの方法を列挙してみよう。



河蒸気

全行程徒歩

まず、考えられる最も安上がりの方法は、江戸時代の五街道の旅と同じように全行程を徒歩で済ませることである。現代なら自転車という交通費のまったくからぬ乗り物があるが、この当時、路銀の乏しい若者がパリに上ろうとする場合にはこれしか方法はないわけで、現にバルザックの『セザール・ビロトー』の同名の主人公は十四歳のとき「ルイ金貨一枚をポケットに忍ばせて故郷を後にし、運を試すべく徒歩でパリにやってきた」とある。このセザール・ビロトーに限らず、十九世紀前半の立志伝中の人物はたいてい徒歩でパリに到着しているようだ。たとえば、アレクサンドル・デュマ・ペールは故郷のヴェエル＝コトレを出奔し、途中、密猟で宿賃と食事代をかせぎながらパリにたどりついたと自伝のなかで回想しているが、こうした貧乏な野心家のほかに、当時はバルザックの『ビエレット』に登場するブリゴーのように、フランス全土を徒歩で渡り歩き、行く先々の町や村で指物師としての腕を磨く職人も多かった。また当然、刑期を終えた『レ・ミゼラブル』のジャン・ヴァルジャンのように、徒歩しか許されぬような者がいたことは言うまでもあるまい。要するに十九世紀の前半には、十八世紀に比べて馬車旅行がかなり大衆化したとはいえず、下層階級のあいだでは状況はそれほど変わらず、全行程徒歩の旅は少しも珍しいことではなかったようである。

一部行程徒歩

しかし、この当時、下層階級のあいだでもっとも普通に行われていたのは、一部の区間を徒歩に

19世紀の換算レート

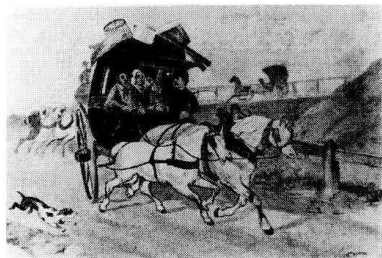
一フラン＝千円
一スー（＝二十分の一フラン）＝五十円
一サンチーム（＝百分の一フラン）＝十円
一エキュ＝三フラン
＝三千円
一ルイ＝二十フラン＝二万円



ジャン・ヴァルジャン

して、あとは割安な交通手段を利用するという方法だろう。十九世紀の前半に石工から身を起し、後に共和派の大統領候補にまでなったマルタン・ナドーはその回想録『元見習い石工レオナールの回想』の中で、クルーズ県の出稼ぎ石工たちがどのようにしてパリに上ったかを詳細に物語っているが、それによると、当時、石工たちはクルーズ県からオルレアンまでは徒歩で行き、オルレアンに着いたところで、クック（「カッコー」という意味）という乗合馬車に乗ってパリに入っただという。このクックという乗り物は、一頭立て二輪の小型乗合馬車で、帝政期から王政復古期にかけて、今日の郊外電車か郊外バスのように、パリと近郊の町を結ぶ役割を果たしていた。ところで、二輪馬車というのは、後に詳述するように、構造的に、乗客は馬車の前から乗り込むようになっていたので、二人乗りが原則で、三人が限界といったところなのだが、このクックは進行方向を向いた長椅子を二列作ってそこに三人ずつ合計六人を乗せるように工夫されていた。たいてい黄色いベンキが塗られ、ほとんどが御者の個人所有だった。そのせいか、中小の乗合馬車業者が郊外の路線に参入するようになると、過当競争による値引き合戦が激しくなり、走行距離四キロにつき十五サンチームまで値下げされてしまった。そこで、いきおいクックの御者は数でこなそうとして、乗客をできるかぎり詰めこむようになった。このへんの事情はバルザックの『人生の門出』の中で見事に描かれている。すなわち、パリと北西の町リラダンを結ぶ路線に古ぼけたクックを走らせているビエロタンは、三人がけの二つの長椅子に四人ずつ合計八人を座らせたらうえに、御者の隣に「もぐり客」を二人から四人、さらに荷物用の車上仕切りに三人という具合に定員をはるかに上回る乗客を乗せ、これをたった一頭の瘦せ馬に引かせていた。しかし、こうした定員過剰のおかげで、乗客はかなり遠くの町まで極めて安い料金で行けたのだから、窮屈さぐらいは我慢する

第一章 我らが主人公、パリに上る（その一）



クックの定員過剰